



サモア国立大学看護健康科学部の学生たちと鈴木さん(最前列中央)

### 鈴木さんのプロフィール

- 1962年 大阪府生まれ
- 1990年 近畿大学大学院農学研究科農芸化学専攻を修了後、日本薬品開発株式会社の研究員となる
- 1992年 関連会社の萩原健康科学研究所に出向。抗ガン抗体の遺伝子解析を行う
- 1995年 バイオセンター株式会社に異動
- 2000年 植物鮮度保持剤の国際特許を取得
- 2003年 加古川市立神野小学校に情報教育の指導補助員として勤務
- 2004年 SVとしてサモアに派遣される
- 2007年 SVとしてサモアに再び派遣される

## 科学教育実験(サモア)

鈴木俊章(シニア海外ボランティア・H19年度派遣)

# 慈愛に満ちた国でもらった笑顔

文= 斉藤桃子(本誌)  
Text by Momoko Saito

製薬会社を退職後、小学校でパソコンの指導を始めた鈴木俊章さん。カンボジアで教師が足りないことを知り、「自分にも何かできないか」と思い始め、たどり着いたのがシニア海外ボランティア(SV)だった。

小学生のころは野口英世やエジソンに憧れていたという鈴木さん。遺伝子の組み換え技術が急速に発展していたことからバイオテクノロジーに興味を持ち始め、大学は分子生物学の道に進むことになる。

大学院を修了後、製薬会社に入社。天然抗酸化剤から植物を活性化させる保存液や美容食を作る方法の開発などに携わった。充実した毎日だったが、40歳を前に退職。

「私はクリスチャンですが、家のローンを払い終えたので、のんびり過ごそうと思っていたとき、突然、神様からの導きを感じて「使徒」として歩もうと思いました」

退職後は、小学校でパソコンの指導をする「指導補助員」として第二の人生をスタートさせた鈴木さん。カンボジアの小学校で教員が不足していることを知ったことから、「自分が何か役に立てないか」と情報を集めるなかでたどり着いたのがSVだった。カンボジアの教育分野の案件に応募したが、赴任が決まったのはサモアで「科学教育」に携わる案件だった。

### 興味を引き出す、目に見える実験

2004年に鈴木さんが着任したのは、首都アピアにあるサモア国立大学看護健康科学部。鈴木さんは科学実験室の管理や運営、微生物学や薬学、解剖学、生理学の授業を担当したほか、パソコンの使い方の指



津波の被害に遭った小学校の校庭で、現地の子どもたちとがれきなどを片づけるJICAボランティア

導や、減少している看護学生の数を増やすためのプロモーション活動なども行った。「まず驚いたのは、衛生観念の無さ。滅菌済みの注射針をハンカチで拭いて使う看護師がいたのです。口でダメだと言っても、『これはきれいに洗ってあるから大丈夫』と聞かないので、実際に目に見える『実験』によって説明し、理解してもらおうようにしました」

鈴木さんが行った実験のひとつは、手に付いた微生物を顕微鏡で観察するもの。洗っていない指、洗った指、エタノールを付けた指、エタノールを付けた後で髪を触った指を、4つに区切ったシャーレに順に押し付けていく。それを顕微鏡でのぞいてみると、どうすればカビやバイ菌が増えて、どうすれば減るのが理解できるのだ。

「指を水で洗っただけでは、水のなかにカビやバイ菌がいる場合もあるので、それらが残ってしまいます。きれいに見えるハンカチにもカビやバイ菌がついていることもある。エタノールで消毒した後、自然乾燥させるのがベストなのです。こんなふうに見えるのがベストなわけです。こんなふうに見えたり、興味を引き出してあげたら、学生たちは純粋で好奇心が強いので、ちゃんと理解するんです」

活動は順調に進み、任期満了を迎えたが、カンボジアへの思いが消えず、再びSVに応募。試験に合格したものの、派遣が決まったのは前回と同じサモアの案件だった。

### 津波災害の復興支援活動

08年、鈴木さんは前回と同じ要請内容で再びサモア国立大学看護健康科学部に配属された。活動はスムーズにいくと思っていたところ、学部長が替わっていたりして、



授業に使える予算が激減。実験材料を調達するのに苦労した。しかし、同僚や病院関係者、近所のスーパードルで働く人たちも顔なじみだったので、彼らの協力を得て、試薬などを病院から借りたり、スーパードルで解剖用に牛の頭をもらったりして、なんとか科学実験の授業を行った。

09年9月29日、アピアの南方沖、195キロで地震が発生。地震の約23分後には約6メートルの津波が海岸を襲った。鈴木さんの家も大学も無事だったが、サモアでも美しいといわれるラロマヌビーチは壊滅的な被害を受けた。

翌日、鈴木さんは配属先の教員と救援活動に参加。ラロマヌビーチ付近の病院で、壊れた滅菌用の器材の補修などを行った。

その後、サモアに赴任中のSVや協力隊員と協力して、被害に遭った小学校の校庭や教室の整備・修復を行うことにした。小学校の校庭は、土砂やがれきで埋め尽くされて、使える状態ではなかったのだ。鈴木さんたちが石や木片、ゴミなどを拾い始めると、現地の人たちは最初は不思議そうに眺めていたが、次第に手伝ってくれるようになったという。

「不思議な縁で、2回もサモアに赴任しましたが、慈愛に満ちた国でした。サモアの人たちは道で会うと、必ず笑いかけてくれる。思わずこっちも笑顔になる。笑顔で日本も元気にできたらいいなと思います」